

第 65 回 国際理解・国際協力・多文化共生のための全国中学生作文コンテスト東京都大会 特賞

東京純心女子中学校 3 年

谷 美命

課題①

あなたが考える平和とは何か。そのために何をすべきか。

副題

なし

ある思想家は言った。「恐怖は常に無知から生じる」と。人々は、無知を恐れて学ぶ。しかし、人々が本当に恐れるべきは無知なのか？

私は十歳の時、アメリカ、ミシガン州の現地学校へ通っていた。当時、私は日本人であることに強い誇りを抱いていた。現地のクラスメイトの憧れの対象となり、日本の文化や黒髪、日本の誇りは私の誇りだった。しかし実際には日本の歴史について浅い知識しか持たず、それを問題視していなかった。明るい面だけを見せていれば楽しく過ごせると思っていたのだ。

十二月七日、それは雪が積もる寒い日だった。黒板には「Pearl Harbor Remembrance Day」の文字。先生が重々しい口調で第二次世界大戦の経緯を説明した。教室中から、好奇と軽蔑の入り混じった視線が私に注がれているように感じた。私は焦りを覚えた。先生から日本人としての意見をいうように促され、震える足で教室の前に立ったのを覚えている。必死に思い出したのは、幕末の開国に関する浅い知識だった。マシュー・ペリーの来航と不平等条約について語ると、一人の少年が静かに反論した。「アメリカが無理やり開国させたって言うけど、それでも日本が真珠湾を攻撃しなければ、関係はここまで悪くならなかったんじゃないか？」と。私は何も言い返せず、うつむいて席に戻った。

この出来事をきっかけに、先生は私たちを日米のグループに分け、それぞれの立場から歴史を学ぶ時間を設けてくれた。私はアメリカ側のチームに、あの少年は日本側のチームに。資料を読み、議論を重ねる中で、私は日本の攻撃がアメリカに与えた衝撃と、多くの尊い命が奪われた無念さを理解した。一方、少年は、当時の日本が追い詰められ、やむなく奇襲という手段を選ばざるを得なかった複雑な国際情勢や苦悩を知った。私達は互いの国の認識を学び、この悲劇を単純に善悪で裁くのではなく、その重みを

直視することの重要性に気付いた。多少の知識を持ちながらもくらい面に目を向けず、明るい部分にのみ関心を示した私。明るい部分に影が潜むことを知りながら、その経緯に関心を持たなかった少年。私たちは、実は「無関心」という点で似ていたのだ。

無知は確かに恐ろしい。だが、それ以上に危険なのは、知ろうとする意志を放棄した「無関心」なのである。「知りたいと思わない」態度こそが、相互理解への道を閉ざし、真の平和を遠ざける。平和は相手と安心できる関係を築き、納得し合うことで成り立つ。相互理解なくしては、物事は良い方向へと進まないのだ。相互理解の入口に立つには、無関心を振り払い、一歩前に進むしかない。互いに関心を持ち、光と影の両方を受け入れることが真の理解への第一歩となるのではないだろうか。

国連平和維持活動（PKO）は、国際社会が無関心に乗り越え、積極的に問題解決に乗り出した象徴的な事例だ。多国籍の隊員たちが協力し、対話と信頼を積み重ねる現場は、私たち一人一人が互いに関心を持つことの大切さを物語っている。

あらゆる分野において、進歩と解決を阻む最大の敵は、無関心である。無関心は、変化と成長の芽を摘むんでいく。表面上は関心があるように振る舞いながらも、明るい面だけを受け入れ、暗がりに目を向けようとしらない態度は、積極的な無知であり、完全な無関心と何ら変わらない。

かつての私の誇りは影すらも隠す、輝かしい日本だった。今の私の誇りは、明るみの後ろにある影に思いを馳せる力、光と影の共存する美しい国家、日本だ。光と影の複雑さを包括的に理解し、愛すること。これこそが無関心という暗がりを照らし、真の平和へつながる道だと信じている。